

12月の星空

今月まず注目したいのは、5等級前後まで明るくなると期待されているレナード彗星 (C/2021 A1)。12日ごろまで未明～明け方に東の空に見える。月明かりの影響がなく、高度は比較的高めと、観察条件が良い。アルクトゥールスなどが目印になるのも好都合だ。双眼鏡で眺めたり写真に撮ったりしてみよう。

7日から9日にかけては夕空がにぎやかになる。南西の空で等間隔に並ぶ金星、土星、木星に連日、月が寄り添う。年の瀬の地上風景と共に眺めたい。チャンスがあれば天体望遠鏡でも惑星を観察しよう。とくに金星が大きく欠けている様子が面白い。

さらに日が過ぎ13～15日ごろには、毎年恒例のふたご座流星群が活動のピークを迎える。上弦過ぎの月が夜半過ぎまで空を照らすため目にできる数は減りそうだが、明るい流れ星が飛ぶことに期待しよう。防寒は念入りに。どうぞ良いお年を。

レナード彗星 (C/2021 A1)

12月上旬から中旬、レナード彗星 (C/2021 A1) が5等前後で見えると予想されている。

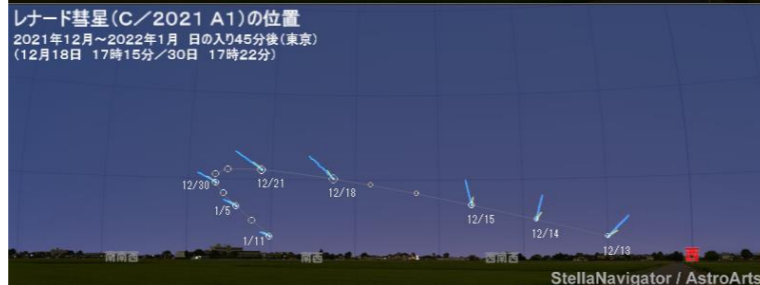


12日ごろまでは明け方の東の空に見える。

16日ごろからは夕方の南西の低空に見えるようになる。日の入り1時間後の高度が10度未満と低いが、年内は5～6等ほどの明るさを保ちそうだ。



6等台から4等台まで増光するとみられ、空の条件が良いところなら双眼鏡を使うと比較的容易に見つけられるだろう。

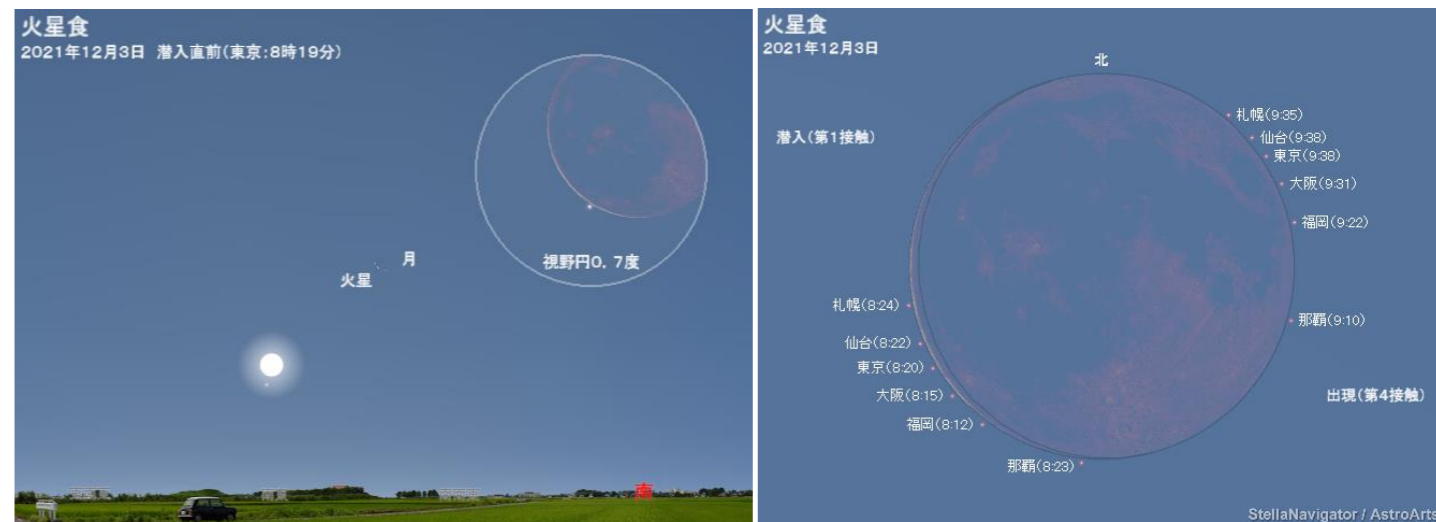


12日23時ごろに地球と最接近し(0.2334au、3491万km)、このころには1日あたり約10度と非常に高速で天球上を動いていく。

2021年12月3日 細い月と火星が大接近／火星食

12月3日の明け方、東南東の低空で細い月と火星が大接近する。日の出30分前の高度が5度前後と非常に低く、火星が1.6等級とやや暗いので、観察の難度は少し高めだ。東南東の空が開けたところで観察しよう。肉眼でも見えるが、双眼鏡を使うとさらに見やすくなる。次回の接近は来年1月1日。

また、日の出後の8時20分ごろから9時40分ごろには月が火星を隠す火星食が起こる。全国で見られるが、日中の現象のため観察には天体望遠鏡が必要だ。観察に挑戦する場合には太陽にじゅうぶん注意すること。



2021年12月7日 細い月と金星が接近

12月7日の夕方から宵、南西の低空で月齢3の細い月と金星が接近して見える。地球照を伴った幻想的な細い月と宵の明星の共演は、数ある月と惑星の接近の中でも随一の美しさだ。年の瀬の慌ただしい時期だが、少し手を止めて、肉眼や双眼鏡で眺めたり、写真に収めたりしてみよう。月と金星の左上には土星と木星もあり、3惑星が同じような間隔で並んでいる光景も見ものとなる。翌8日には細い月と土星が並び、翌々日の9日には月と木星が接近する。日ごとに並び方や月の形が変化する様子も楽しみたい。



2021年12月9日 月と木星が接近

12月9日の夕方から宵、南南西から南西の空で月齢5のやや細い月と木星が接近して見える。

月と木星の右下には宵の明星の金星と土星もあり、3惑星が同じような間隔で並んでいる光景も見ものだ。肉眼や双眼鏡で接近の様子を眺めたり、3惑星と月を地上風景と共に写真に収めたりしてみよう。月と木星の次の接近は来年1月6日。



2021年12月14日 ふたご座流星群が極大

12月14日、三大流星群の一つに数えられるふたご座流星群の活動が極大となる。12月13日宵から14日明け方と14日宵から15日明け方が見ごろ。より詳しくは「[ふたご座流星群特集](#)」をご覧ください。

12月14日、ふたご座流星群の活動が極大となる。極大時刻は夕方16時ごろと予測されており、前日13日の宵から14日明け方にかけてと、14日宵から15日明け方にかけての2夜が見ごろとなる。

両日とも2時ごろまで上弦過ぎの月明かりが空を照らしているため、見やすいのはそれ以降から明け方までとなる。見晴らしが良いところで1時間あたり20~30個ほどの流れ星が見られそう。また、数は減るものの前後数日間も見ることができる。流れ星は空のあらゆる方向に飛ぶので、街灯や月から離れた方向を中心に、なるべく広く空を見渡そう。防寒の備えは万全に。

ふたご座流星群は、1月のしぶんぎ座流星群、8月のペルセウス座流星群と並ぶ三大流星群の一つだ。母天体は小惑星ファエトンとみられている。



2021年12月23日 こぐま座流星群が極大

12月23日、こぐま座流星群の活動が極大となる。22日宵から23日明け方が見ごろだが、月明かりがあり数は少ない。

12月23日、こぐま座流星群の活動が極大となる。予測極大時刻は0時ごろで、22~23日の夜が見ごろとなる。

もともと出現数が少ない流星群であることに加えて、一晚中月明かりがあるため条件が悪く、ほとんど見えないかもしれない。冬から春の星座を眺めている間に1つ見ればラッキー、くらいの気持ちで気長に待ってみよう。防寒は念入りに。

母天体は13.6年周期で公転するタートル彗星。彗星の通り道を毎年この時期に地球が通過し、そこに残されていた塵が地球の大気に飛び込んで上空100km前後で発光して見えるのが流星群の流れ星だ。



2021年12月下旬 水星と金星が接近

12月下旬ごろ、夕方の西南西の低空で、水星と金星が接近して見える。

最接近は12月29日ごろで、5度未満まで近づき、前後数日間は双眼鏡の同一視野内で見ることができる。金星を目印にして水星を見つける好機だ。日の入り30分後の高度が10度未満とかなり低いので、西南西の空が開けたところで観察しよう。双眼鏡を使うと見やすくなる。

金星は今後、1月9日の内合を経て、1月中旬ごろからは「明けの明星」として明け方の東南東の空に見えるようになる。

